

フローリスト
吉野絵美さん
(平21・北みどり)



よしの・えみ●1988年生まれ、北海道出身。WEDDING装花ブランド「MUKU」にてチーフデザイナーとウエディングマネジャーを兼任し、都内5つ星ホテルで大規模なウエディングデコレーションを数多く手がける。2023年に独立し、フラワーデザインブランド「ekarkar」を設立。ラグジュアリーブランドの店舗装飾など、幅広いフラワーデザインを展開する。

吉野絵美さんは、新進気鋭の女性フローリストとして活躍する異色の専修人だ。北海道出身で、専修大学北海道短期大学みどりの総合科学科を卒業。短大としては珍しい農学系の学科で、吉野さんは学んだ。フローリストという現在の肩書きから、花などの園芸を専門にしていたのかと思いきや、実は林業の世界を目指していたという。

「幼い頃から北海道の大自然に囲まれて育ち、森林に愛着がありました。高校

生になって、地元の森に関わる仕事をしたいという思いを抱き、道内の森を守るために林学を学ぼうと専修大学北海道短大に入ったのです。当時は正直、花にはあまり関心はありませんでした」と、吉野さんは振り返る。

一時は“林業女子”が話題になり、今では林業に携わる女性も増えてきた。ところが吉野さんが短大を卒業した当時、林業の世界は男性中心の社会だった。短大で林業を専攻していた学生のうち、女性

は1割に満たない程度しかいなかったそう。たしかに林業は危険をとまなう力仕事で、どちらかといえば男性の職業というイメージがある。

「林業ではきつい肉体労働が多く、事故のリスクも高い。ただ、私は短大で実習なども経験しており、体力にも自信があったため、自分なりにこなせると自信を持っていました。しかし、当時の業界では“女性に林業は無理”という先入観があったようで……。林業関係では、そ

常に真剣勝負の世界で、自分ならではの価値をいかに見出すか

北海道の大自然で育ち、その原風景から自身の将来像を描いて決めた進学。しかし、思ったようにはいかず、実際にはまったく違う道へと進むことになった吉野絵美さん。

今でこそ、フローリストとして活躍する日々を送っている彼女だが、そこに至るまでには一体、どのような選択があったのだろうか。

もそも女性の求人がほとんどありませんでした。見学だけは受け入れてくれるところもありましたが、結局、林業関係への就職を諦め、他のジャンルへと進路を変更したのです」

それまで興味のなかった、“花”の仕事に就くことに

林業の道へ進めなかった吉野さんが、新卒で就職したのはフラワーショップだった。そこで、初めて花の仕事に携わることになる。

「短大では園芸関係の授業もありましたが、私は受けていなかったので基礎知識もなく、フラワーアレンジメントなどの資格も取っていませんでした。花に関するスキルやノウハウは、会社の先輩を見習いながら、独学で身につけたんです」

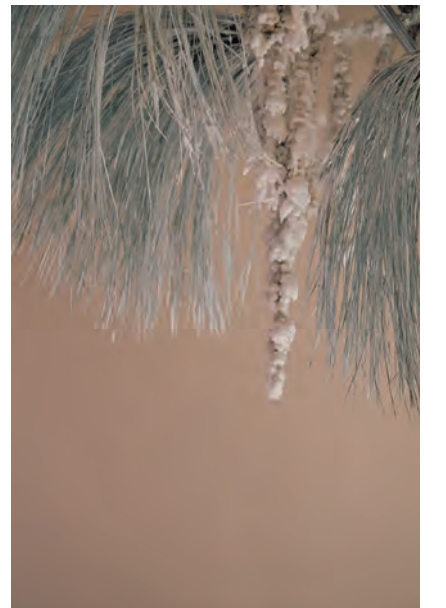
花の扱いやアレンジの方法など、さま

ざまな知識が必要となる仕事だ。しかし、その会社は間もなく倒産してしまった。

「仕事として花の勉強はしていましたが、個人的にはカフェ巡りが好きだったので、心機一転、飲食関係の仕事も考えました。ただ、なかなか就職先が決まらなくて。またフラワーショップに応募してみたら、前職での経験が評価されたのか、生花店やウエディングのフラワーデザインを主力事業としている札幌の企業から、すんなりと内定をもらいました」

そんな経緯で入社が決まった会社だったが、そこで吉野さんは花の道に“覚醒”し、フラワーデザインを究めようと、のめり込んでいったと明かす。

「花の魅力に気づいたとか、花が好きになったとかいうわけではありません。苫小牧市でリゾートホテルのフラワーデザインを担当していたのですが、仕事で負



自身初の個展「冷温」にて、「豪雪」の北海道に見る“つらら”をイメージしたアレンジメント



ライブイベントでは、雪の冷たさの中にある“かまくら”を花でつくり、温かみを表現。周囲には雪玉のモチーフもあり、子どもたちが遊ぶ情景を思い出させる

けたくない、見返したいと思う経験をいろいろして、負けじ魂に火がついた、といったほうがいいでしょうね」と、吉野さんは微笑む。

フラワーショップからウエディングへ。同じ花を扱う仕事でも、その内容はまったく異なる。新たな知識を身につけながら、道内で約8年の経験を積んだのち、吉野さんは北海道を出て、東京のWEDDING装花ブランド「MUKU」に転職した。「フラワーデザインという領域で、もっと大きな仕事がしたい」というアンビションが心の中に育っていたのだ。

「北海道でも冠婚葬祭などの花に関する仕事はできますが、どうしても花は“脇役”扱いになりがちでした。それに比べて東京では、イベントにおいてフラワーデザインにかかる予算も、使う花の種類や量も、北海道とはケタ違いだと聞いていたのです。だからこそ、東京という大舞台で、自分の腕を試したくなりました」

MUKUでは、現在も“師匠”と仰ぐ上司にも出会った。吉野さんはもともと、同じ会社の中でも、ファッションショーなどの大規模イベントでフラワーデザインを手がける別部門を希望していたという。ところが「まずはウエディングのフラワーデザインからやっていこう」と勧められ、都内5つ星ホテルのウエディング

均が50万円に対して、100万円以上という例も珍しくない。

「目が肥えているお客様ばかりで、希望する水準も高い。一方でいくら費用がかかって、記憶に残るような、すばらしいフラワーデザインにしたいとおっしゃる方が多いんです。私としても、より大きなやりがいを感じました。それに、結婚式は人生における非常に大きなイベントです。式場で、新郎新婦のストーリーや思いをどのように花で表現していくか、お客様の要望を伺いながら、ときには表面化していないニーズも引き出してプランを練り、創意工夫を重ねる毎日でした。デザイナーとしての腕も、かなり磨かれたと思います」

そうして経験を積むうちに、吉野さんはウエディングの仕事と並行して、当初やりたいと願っていたイベントプロデュースでのフラワーデザインを担当する機会も増えていった。それも現在につながる大きな学びとなる。

例えば、ファッションのコレクションには必ずテーマがあり、フラワーデザインにも、その世界観を表現することが求められる。イベント主催者のイメージを、どのように“花”という形に落とし込んでいくか。「ウエディングと同様、常に真剣勝負でありながら、競争の激しい世界



独立後に担当した、ラグジュアリーパジャマブランドのAWコレクションにおけるキービジュアルのフラワーデザイン

でコミュニケーション能力や企画力も問われます」と、吉野さんは強調する。

その中で心がけてきたのが、「プラスアルファの提案力」だ。受注ビジネスとしてのデザインは、クライアントのニーズを第一に考えるので「受け身」になりがちだが、吉野さんは一味違っていた。「基本的には、お客さまの要望に沿ってデザインします。ただ、そこに自分なりのアイデアを付加した、追加プランも提案していました。自分のプランを気に入ってもらい、それが採用されれば、それこそフローリストとしての醍醐味で、自分ならではの価値じゃないですか」

花にとどまらない、自分の表現を残していく

吉野さんはそうしてフラワーデザインのキャリアを重ね、得意客も増やしていった。仕事にたしかな手応えを感じ、充実した毎日。その中でフローリストとして大きな存在になっていく道もあった

はずだ。でも、次第に「独立」を考えるようになったのはなぜか。そこにはクリエイターとしての矜持があった。

「会社に所属している以上、作品の著作権は会社に帰属します。フローリストとして、“自分のデザイン”だと主張はできません。けれども私は、“吉野絵美”の表現を残していきたいという気持ちが、強くなってきたんですね。それにウエディングでは明るい花、きれいな花、幸福を表現できる花などを使うことが多く、表現が限られることも少なくない。個人的には黒い花、毒々しい色の花も好きなので、そうした花を主役にしたデザインをしてみたかったこともありますね」

吉野さんは2023年、8年間勤務した会社を退職し、自らデザイン会社を設立。現在はラグジュアリーブランドの店舗装飾やイベントなどを中心に、飛び回る日々を送っている。

そして2025年1月には、吉野さんが愛する故郷の原風景である「北海道の雪



「毒々しい花も好き」と語る吉野さん。きのこがその雰囲気を出す

景色」をイメージした初の個展も開催した。テーマは冬の厳しさの中にも、暮らしの温もりを感じさせる「冷温い初」。白を基調とした会場には、白樺の茂る「初雪」の降った森や、「積雪」の庭で子どもたちが遊んだ様子を表現した。「豪雪」時期の“かまくら”をイメージした空間では、温かいコーヒーを味わえるという演出もある。会場では、実際に吉野さんが北海道へ足を運び、雪を踏みしめる音などをサンプリングしたオリジナルのBGMが流され、コンテンポラリーダンスとコラボレーションしたフラワーデザインのSHOWCASEも実施。フローリストでありながら、“花”にこだわらない、吉野さんの自由な発想が存分に発揮されていた。

「これからもフラワーデザインのみにとどまらず、さまざまなジャンルのクリエイターの方々と新しい空間をつくり上げ、表現の幅を広げていきたいです」

そう意欲的に語る吉野さんは、新たに校友となった後輩たちにもエールを送る。「大学を卒業したばかりでは、将来どうなるか、自分でもよくわからないでしょう。私もまさかフローリストになるとは、夢にも思っていませんでした。でも、誰にでもチャンスは巡ってきます。それを逃さずつかめるように、自分が本当にやりたいことに気づく力をつけてほしいですね」

(2025年2月取材)